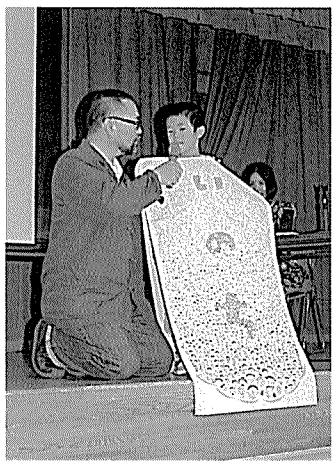
先祖への感謝・家族の絆を深める機会に
『いのちのまつり』トークライブ開催
日本青年会議所石材部会・「未来」創造実践事業

【岡山・笠岡】「目に見えない大切な命の繋がりについて考え、ご先祖への感謝の気持ちや家族の絆の大切さを感じてもらうと共に、お墓の意味や素晴らしさを知ってもらうこと」を目指した事業「いのちのまつり～目には見えない大切なもの～トークライブin笠岡」が去る9月30日、岡山県笠岡市の笠岡市中央公民館で開催された。

主催の日本青年会議所石材部会（中村卓史部会長）では今年度、核家族化・少子化など社会構造の変化に伴い「無縁社会」という言葉が大きくクローズアップされる中、「お墓をきっかけとして人が集い、人と人との新たな繋がりを生み出す機会づくり」を目指した事業を展開。その一環として行われた今回の事業は、エンドユーザーに対する「お墓の市場創造」という視点においても参考になる事例であり、業界関係者も多数オブザーブ参加していた。

お墓の意義を伝えるきっかけに

今回の事業は、沖縄を舞台にした絵本『いのちのまつり』シリーズの作者・草場一壽氏が結成している「いのちのまつり講演隊」を招き、絵本の読み聞かせや講演隊による命にまつわる体験談などを紹介してもらうもの。同講演隊は2006年から活動をスタートし、「目には見えない大切なもの、〝いのち〟への想いを伝える活動」を全国各地で行っている。


子どもたちと連綿と繋がる命の大切さ、尊さについて学んだ

親子43組・103名が参加

草場氏、副田氏からは命に関する様々なエピソード・体験談などが紹介された

今回は、ナビゲーターとして草場一壽氏、読み語り担当としてフリーアナウンサーの副田ひろみ氏が参加。会場を巻き込む軽妙なトークに、参加した親子43組・103名も自然と引き込まれていた。

トークライブでは、命にまつわる様々なエピソードや体験談などが紹介されたが、その中心となるのが絵本『いのちのまつり』の読み聞かせ。

物語は、沖縄に初めて訪れたコウちゃんという男の子が主人公の話。沖縄独特の亀甲墓の前でサンシンを弾く人、歌う人、踊る人たちで賑わっている様子を見たコウちゃんが、島のオバアに「みんなでなにしてるの？」とたずねる。するとオバアは「わたしたちにいのちをくれた、だいじなご先祖さまのお墓参りさぁ～」と答える。今度はオバアが「ぼうやにいのちをくれた人は誰ね～？」とたずねる。コウちゃんは「お父さんとお母さん」の名前をあげる。そして二人の会話は、その前の先祖、その前の前の先祖というようにさかのぼって、ご先祖さまをどんどん数えあげていく。

中村卓史部会長

絵本では折りたたまれた8ページを開くと無数のご先祖さまの顔が広がる仕掛けもあるが、今回のトークライブでもスクリーンに映し出される映像を交えながら多くの命の繋がりによって今の自分があることをわかりやすく説明。それまでザワザワしながら話を聞いていた子どもたちも、自ずと絵本の世界に入り込んでいた。

業界人としての使命

その後、会場から代表で選ばれた子どもに無数のご先祖さまの顔が書いてある「いのちのベスト」を着てもらい、自分が誰から生まれたのかを問いかけていく。そこで、両親、祖父母、曾祖父母など、連綿と繋がる命の尊さ、大切さについての感触を会場全体で共有していく。

草場氏は「宇宙の始まりからずっとずっと命は繋がっている。誰一人かけても皆さんはいない。ご先祖さまは今も皆さんの中で生きていて、皆さんのことを常に応援してくれている」と述べ、絵本で登場した沖縄のお墓参り（清明祭）についても説明。

沖縄では「子孫が光り輝いて生きていることが最高の先祖供養。だから、年に一度の清明祭に一族が墓前に集まって連綿と繋がっている命に感謝し、その喜びを表現している。お墓があるから全国に飛び散っている一族が集まって互いの命を祝い合う。それが本当に素敵なスタイルだと思って絵本にしました」と述べ、会場からの共感を得ていた。

トークライブの後には「いのちの繋がりを書いてみよう」と題し、参加者の家族に家系図を書いてもらう企画が用意されていた。そこでは両親、祖父母、曾祖父母の名前を記入してもらう専用シートに書き込んでもらうのだが、これがなかなか埋まらない。祖父母でさえ完全に記入できた人は少なかったのだが、参加者の中に両親、祖父母、そして計8人いる曾祖父母のうち7名の名前まで全て記入できた親子がいた。

その家族に話を聞いてみると、普段から先祖のことを家族の話題にしていて、お墓参りのときなどには墓誌の祖父母や先祖の曾祖父母の名前を読み上げ、子供たちに説明しているのだという。

この結果は、全国各地で講演活動をしている草場氏も驚かせた。「ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんまで7人も書けた人は初めて。さすが石の町ですね。命の大切さに感謝する節目として、お墓参りとかご先祖参りは非常に大切な行事だと思います」と感想を述べていた。

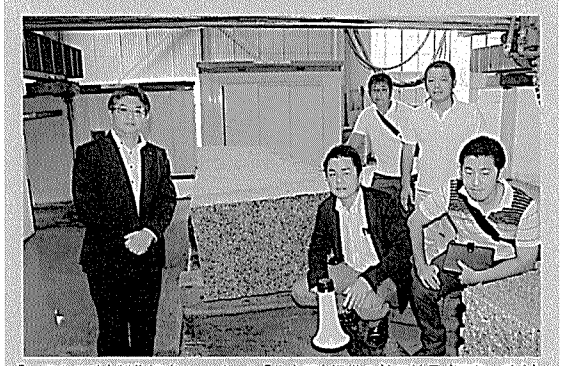
今回のトークライブは、自分が生まれたことの奇跡、命の尊さ、ご先祖への感謝の気持ちが自然と伝わってくる内容であり、その成果は参加者の声からも聞き取れた。

〝お墓参りが命の尊さを学ぶための場になる〟とは業界内でもよく聞くが、命の繋がりや先祖を敬う心が養われていることは、社会全体にとって大切なこと。エンドユーザーに伝えていかなければならない私たち業界人の使命ではないか、と感じたライブでもあった。

参加者からのアンケート回答より

- 考えてみれば、当然のことだけど、なかなか実感できてないことだと思います。実はすぐ上の祖先の名前は聞いたことがあるようで、すっかり忘れてしまってました。今日、ここに来なかったら、そのままになっていたかもしれません。ステキなおふたりのお話し、ありがとうございました。
- このライブをきっかけに先祖の事を考えて、家族と話し合いたいと思います。命はつながっているという事を再確認できました。今、家族に恵まれているというありがたみを感じました。
- いのちの大切さを改めて感じました。子供に、日頃から伝えれていないと思い、今後、さり気ない生活の中で話をしたいな（伝えておきたいな）と思いました。人の大切さ、いのちの大切さを考えさせられ、とても良かったです。帰ったら、ご先祖様についてきいてみようと思います。ありがとうございました。
- 日々、子供達とのかかわりの中で、そこまで命について考える事が無かったので、先生方のお話を聞かせて頂き、あらためて大切な事に気付かされました。子供達にも、自分は大切なんだ、生きていていいんだと、愛されている実感を持って、生きていけるように育ってくれたらと思います。とは言え、感情で怒ってしまう事も多々ありますが、何があっても、私はあなたたちの味方で大好きだよというメッセージは伝えていきたいと思います。

鎮魂碑「いのちの碑」の建立を計画


「いのちの碑」製作担当メンバーと「北木石」提供の鶴田社長（写真一番左）

事業参加者に復興への想いを絵馬に書き込んでもらった

鎮魂の想い、参加者から「いのちの碑」建立へ

日本青年会議所石材部会では現在、東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県多賀城市の八幡神社に鎮魂碑「いのちの碑」の建立を計画しているが、今回の事業参加者に復興への想いを伝えてもらおうと、トークライブ終了後の第二部において、鎮魂碑に結びつける絵馬を用意。参加者全員がメッセージを書き記し、早期の復興と鎮魂の祈りを捧げた。

この鎮魂碑は、事業開催地でもある笠岡の銘石「北木石」を主に制作されるもので、石材部会会員でもある鶴田石材㈱（鶴田康範社長）が提供。周りの石柱の間に絵馬を取り付ける予定。除幕式は12月15日に行われる。

なお、事業開催翌日（10月1日）には北木石産地の現状などに関する鶴田社長の講演会、鎮魂碑の加工を行っている鳴本石材㈱（岡山県笠岡市）の工場見学も行われた。